

阿部弥一右衛門のばあい

藤 本 千 鶴 子

従来「阿部一族」は、「興津弥五右衛門の遺書」とは対照的に、近代抵抗精神の萌芽ともいふべきものを描いた作品として読まれて来たようである。

この二作品の対照的性格を、最も明確に図式化して見せたのは、高橋義孝<sup>(1)</sup>である。彼は、「興津弥五右衛門の遺書」の中心主題が「自己没却・反個人的・中世的」であるのに対し、「阿部一族」のそれは、「自己主張・個人主義・近代的」である、とまとめている。そして、「興津」的作品群の主人公たちは「いずれも自己の上に存在する何か大きなもの（運命とか忠義とか義務とか国とか）に自分の心身を委ねきって、かりそめにも己れを主張し異を立てるようなことがない」のに対し、「阿部一族」的作品群の主人公たちは、「討たれる阿部弥一右衛門の『だが己は己だ。好いわ。』という言葉に象徴されている」ように、「みな一身の利害得喪をかえりみることなく自分というものを強く主張する」としている。これは、「だが己は己だ。好いわ。」という言葉を根拠にして、阿部弥一右衛門の人間像を、「近代的」であると断定したものであるが、はたして、鵜外はどのように描いたのであろうか。

そこで、「己は己だ」という言葉は、どういう場面で、また、どういう心情において、発せられたのか、また、前後の行動とどうつながっているのか、という諸点から、この論を検討してみよう。

まず、この言葉を発した場面は、阿部弥一右衛門が殉死を何度願っても許しを得られないまま主君忠利がなくなったときである。殉死を何度も願い出るのは、第一義的に考えると、「自己没却・反個人主義・中世的」なあり方である。また、「だが己は己だ。好いわ。」に続くのは、「武士は妾とは違ふ。主の気に入らぬからと云つて、立場が無くなる筈は無い」という言葉である。「だが己は己だ。好いわ。」という自信を支えているのは、「立場」がある、武士の面目が立つという安心感である。こういう意識に支えられた「己は己だ」という言葉を、「近代的」だとするのは、少々無理があるようである。いかにも「立場」に未練がましい、二股的な自我になってしまう。また、「武士は妾とは違ふ」という言葉は、「武士」という身分に対する自敬の意識ではあるまいか。これもまた、「近代」性とは遠いものであろう。

そして、さらにのちの行動と比較してみると、「己は己だ」と言つて生きのびて、わずか一箇月半余の後、急遽切腹して果てているのである。その動機は「命を惜む男」という悪口が耳に入ったからであった。命を惜しまないのに命を惜しむ男だと誤解され、それを不当な侮辱とし、雪辱のために死んで見せるのは、中世的な感覚である。

もし、「己は己だ」という言葉を「近代的」だとし、殉死の願い出と切腹とを「中世的」だとするならば、弥一右衛門の三つの行動は矛盾していることになる。しかし、これはわずか一箇月半余の間の弥一右衛門の一連の行動である

から、三つの行動を統一する説明がなされなければならぬ。

それを説明したものに、唐木順三、長谷川泉、岩上順一、稲垣達郎などの諸説がある。いずれも、阿部弥一右衛門は自己を主張して殉死に抵抗するけれども、酷薄な封建倫理によって、結局は破滅させられざるを得ないものであるとしている。高橋義孝の「自己主張・個人主義・近代的」という論の同一線上において、時代的制約を考慮したものである。

そのうち、唐木順三の論<sup>(2)</sup>がおもしろいのでとり出してみると、「歴史と社会の必然的制約は動かし得ない。では、この動かし得ないものの前に、なほ人間が頭を垂れないのは何故であるか。鷗外はそれを、ここでは「意地」と見た。意地が必然に抗する。意地が敵を生む。然し必然の前に立つ意地は所詮運命の裁きを受けざるを得ない。」と言っている。「意地」という言葉によって、阿部弥一右衛門の行動を解釈しようとする点は、注目しなければならぬ。なぜなら、鷗外は、意地という語を、「阿部一族」の中で、弥一右衛門の行動を説明するのに二度使っており、単行本の名を「意地」とし、他に、その中の『佐橋甚五郎』について、広告文で「意地強き者」と自ら書いているからである。ただ四例ではあるが、いずれも、作品の性格を総括的に説明する重要な例ばかりであることを考えると、「意地」という観点から弥一右衛門説明を試みるのは、有効な方法であると言えよう。

しかしながら、「意地」をどう解釈するかという点については、まだ問題が残されている。弥一右衛門が意地で切腹するのを、「歴史と社会の必然的制約」である殉死に抗したために裁かれるのだ、と解釈して済ましてよいものだろうか。殉死は、はたして必然として描かれているのだろうか。私は、閑却されて来た、弥一右衛門の主体の側にも、彼の切腹の原因があるのではないかと考へる。

たとえば、のちに書かれる栗山大膳は、「大事業大忠節」（「葉隠」）という大義を支えにしているから、当座の世間の悪評には動じない。これとくらべてみると、弥一右衛門が、世間のいいなりに死を急いだのは、俗流の非

難を越えるような確固とした理念を持たなかったからではないだろうか、という推察もできるのである。これは、主体の思想の問題が、生死の選択の原因になっているということができる。また、弥一右衛門が切腹するのは、資質にも原因があると思われる。鷗外の歴史小説の諸人物の中には、山本宇平のような近代的合理主義を代表する人物、畑十太夫のような臆病者、佐橋甚五郎のような功利的打算的人物などがあり、彼らはみな、恥辱に対して鈍感である。それにくらべて、弥一右衛門は、屈辱に対して神経質なくらい敏感に反応する。

これらのことから、俗流の非難を越えるような思想が欠除していること、恥辱に対する神経質さが、弥一右衛門に死を選ばせたものではなからうかとも考えられる。「掟」によって、人間が受動的に死へ向って突進して行く面があるの、主体の思想と資質が原因で、能動的に死へ向って突進して行く面があるのではなからうか。抵抗そして破滅というような、近代的解釈とは別の、当時の武士の倫理観から迫る読み方が、必要なのではあるまいか。

さらに別のところで、唐木順三は、「命を惜まず、名を惜む侍が、複雑な政治と葛藤の中で示すものは、まづ意地であらう。その意地（寛永十八年頃の意地）を元龜天正的な人物（柄本又七郎）によつて批判させてゐるのである」と言っている。

ところで、『甲陽軍鑑』『武道初心集』『葉隠』をはじめ、津田左右吉、古川哲史などの見解の一致するところによると、元龜天正の頃の武士の気風と、寛永十八年頃の武士の気風とは、ほぼ同じものとして捉えられている。そうだとすると、二つの時代の、名を惜しむ内容と意地の内容とが、共に明らかに異質である、という推測は少々無理のようである。鷗外自身は、はたして、元龜天正的な意地を代表する柄本又七郎によって寛永十八年頃の意地を代表する弥一右衛門を批判させるように描いたのであろうか。

また、斎藤茂吉は、「当時（寛永十八年頃）の武士階級を支配してゐた一つの道徳（武士道）は、窮屈で通達せぬところがあつても、これは、『意地』で統一せられてゐるところがあるといふのであらう。そしてこれは、西鶴なども、

「人には意地と云ふ事ありて、年頃互に武を争ひける」といひあらはしてある程だから、敢て鷗外の新説といふわけでもないが、それを現代に生かしたところに見識が見えてゐる。「弥一右衛門は意地ばかりで奉公して行くやうになつてゐる」(阿部一族)は、普通の現代生活にもあり得ることだが、当代の武士の謂ふ意味の、「意地」では無くなつてゐる<sup>(3)</sup>。」と書いてゐる。

私は、この文章を、多くの問題をつきつけられたという意味で、興味深く読んだ。これは、弥一右衛門の意地を、寛永十八年頃の意味ではなく、現代的な意味として解釈しているらしいが、はたして、そう言えるのだろうか。これも検討を要する問題である。また、当時の武士の意地と、現代使われている意地の意味と、どう違うのだろうか。これらの問題を、もう一押し深く追求するならば、阿部弥一右衛門の意地も、ある程度解明できるだろうと思ふ。次には、以上あげたような諸点を主とし検討してみたい。

## 二

「大言海」は、「意地」の語義を次のように説明している。

(一) (地ハ存在スルトコロヲ云フ) ココロネ。心根。意思。

(二) (前条ノ語ヲ発動セシメテ云フナラム。意地を張る(いちぢり)ナド云フ意ヲ含メテ解スベシ。転ジテ、意地がわるい(いちぢわる)ノ意ニモ移ル。意気張、意気地ナド云フモ、コレヨリ出デタル語ナリト思ハル。) 我意ヲ張りトホス心。抗敵気。

(一)は、肯定否定の価値評価を含まない表現になっているが、昔は、この意地が欠くべからざる重要なものとして多く考えられてきた。ところが、現代では、「意地」があるということを、積極的に良い意味で使う用語法が少なくなつて、悪い意味で使うことが多いようである。(二)の争気の意味に属するものに、現在、「意地を張る」「意地を通す」「意地づくです」「意地になる」「男の意地にかかわる」などの使い方があがるが、いずれも、争気が強くて無茶を通すとか、

体面とか世間体のために人を突きつけて徹底させるまで我意を言いつのりしつゝのもの、非難すべきものとして使われている。「意地がきたない」の意地は(一)の意味であるが、飲食や物を貪ることを言い、中世のような気骨がないという意味には使われなくなった。これらのことを裏返して言えば、現代では「意地を通す」「意地がある」などを、操守がかたく気節があることとして肯定的評価をしなくなったと言えよう。これを「近代的自己主張」と比較すると、意地は対立理論を認めないであくまで我意を押しつけようとする絶対的・中世的なものであるのに対し、自己主張は、個の尊厳に立って対立理論も認めるという相対的・近代的なものであると言えよう。現代、意地が否定的に使われるのも、不合理とむりやりに統一を嫌うからであろう。

それでは、「阿部一族」の背景となつてゐる寛永十八年頃の武士の意地とは、どういう意味あいのものであつたのだろうか、という問題に移ろう。

当時の武士の意地がどういふものであつたかを、正面から取り上げた論が、日本倫理想史の方面にあれば便利なのであるが、あいにくそういうものは見あたらない。だが、昔から今日までの多くの人々の「武士道」の説明の中に、「意地」という語がかなりしばしば出てくる。

そこでまず、それらの文によつて、寛永十八年頃の武士の気風は、唐木順三の論の前提になつてゐるように、戒律化した徳川時代の気風が既に現われていたのか、それとも、戦国時代(元龜・天正前後)の気風の引き続きであつたのか、ということから見て行こう。

当時の書物としては、『武道初心集』に、「五・六十年以前(明暦・万治・寛文の頃をさす。これは寛永十八年よりも十五ないし二十五年後)までは……武士の古風残り」、「葉隠」に、「五・六十年以前(同上)迄の士は……今日討死……と必死の覚悟を極め」五十年以来男の脈が女の脈と同じ物になり申し候。……さては世が末になり、男の気おとろへ、女同前になり候事と存じ候。」とあり、また、のちの研究としては、津田左右吉が「政治上に於いて徳川氏の権力の全く固まり、幕府政治の整頓した寛永時代までは、文化に於いてもまた概

して戦国時代の引き続きといつてよからう。」<sup>(4)</sup>と言っているのなどによれば、寛永十八年頃の武士の気風は、一応、戦国時代の引き続きであったと考えてよさそうである。そして、「武士道」という語は、戦国時代の武士の気風を言うもので、その特徴は、「結果の如何を問はずただひたすら動機の純粋を生命とする」<sup>(5)</sup>（古川哲史）ものであった。これは、山鹿素行（『山鹿語類』中の「士道」寛文三年）によって確立された「士道」の、戒律的・結果主義的性格の気風とは、明らかに違うものであった。「武士道」は精神の自律立法的性格を持ったものであった（古川哲史）。そうすると、弥一右衛門の切腹の原因を、「自ら進んで形骸的倫理の判断に故意に従ひ」<sup>(6)</sup>（岩上順一）、「酷薄な封建モラルのために」「一種の「自然」の暴力」<sup>(7)</sup>（稲垣達郎）、「歴史と社会の必然的制約」（唐木順三）などに求めるのは、無理であろう。

寛永十八年頃の武士の気風が、「武士道」にあるとすれば、「武士道」を説明した、当時の書物としては『甲陽軍鑑』『武道初心集』『葉隠』、のちの研究としては、『文字に現はれたる我が国民思想の研究』（津田左右吉）『日本倫理思想史』（和辻哲郎）『武士道の思想とその周辺』（古川哲史）などの中に使用されている「意地」の用例を吟味することによって、当時の武士の「意地」を規定してよいだろう。

『葉隠』を除いて、他の六書は、『大言海』の「(一)コロコネ、心根、意思」の意味に含まれるべき、武士としてあるべき心構えという意味で使用している。そして、「武士の意地」という語を、「武士の正義」「武士の本意」とも言いかえ、「百姓町人の意地あひ」「夫人足に等しき様子」(以上『武道初心集』)「私の意地」「女らしい猜みの情」(以上和辻哲郎)などに反立する心構えであって、価値あるものとしている。

その価値ある「意地」の内容は、どういうものであったか。

「主従関係と独立に生命を惜しまない潔さそのものを尊重すること」「正直・慈悲・智慧の理想を、個人の心構えや気組みの中に貫徹しようとする自敬の道徳、高貴性の道徳」(和辻哲郎)とする立場と、「忠義勇」(古川哲史)と

する立場とがある。すなわち、主従関係から独立した意地を尊ぶ気風と、主従関係を最上位に置いて「私の意地」を下位に置く意地を尊ぶ気風とがある、ということになる。両者は、『甲陽軍鑑』『武道初心集』の中でも併存している。しかし、数から言えば、主従関係から独立した意地を内容とするものが絶対多数である。享保頃の執筆とされている『武道初心集』においてさえ、十六対六の割合で、主従関係から独立した意地を多く述べている。

「悉く無心懸けにて、臆意は鈍くて、いかにも口さき無穿鑿にて、鼻肩々々に物をいひ、一段がきつにて、きれたる意地少しもなく」「意地きたなくなり人をぬかんと存する」(『甲陽軍鑑』)、「人の相談相手に被頼たる甲斐もなき仕合畢竟不頼母敷意地よりおこる不屈也」「請口にぶく不肖々々の様子にみゆるは意地のきたなき共申されはなれのなき共申也」(『武道初心集』)などと使われている。これらは、意地のないこと、意地きたないことを非難したものであるが、裏返して見ると、権勢や利欲に対する恬淡さ、義・信・決断力・勇を重んずることなどを、武士の意地の理想としたのだと言える。「武士道は剛強の意地あるを第一と仕る」(『武道初心集』)などの、意地あることを肯定的価値的に述べた例も少数ある。(意地という語を使わないで意地を述べたものもあるであろうから、これらだけを武士の意地の内容だとするのは危険であろう。)

津田左右吉は、それをもっと網羅的に述べている。「戦闘が彼らに敢為と忍耐とを教へ、死を怖れざる勇猛心と死を見て帰するが如き安心とを与へ、強者に屈せず弱者を侮らず、権勢と利益に惑はされず、友を愛し人を慈み、信義を守り礼節を重んずる気風を養はせたのである。武士の意地といふのも武士の義理といふのもやはり此のことであつて、或はそれを意志の側から見、或はそれを理性の側からいつたに過ぎない。」

これらの「武士の意地」の理想が内容として重んじている気風自体については、みな、価値的な評価で一致しているが、意地の発動地盤の問題となると、それを他律的なものだとする津田は、否定的な評価をし、自律的なものだとす

る和辻は、肯定的な評価をしている。

津田は、「武士の命を棄つるは名を惜み世の嘲弄を恥づる故なり」（『大友記』）を引いて、戦国武士の意地の発動基盤は、「世間体」「体面」であるとし、それは「不純」「矯飾」であると評価している。

それに対し、和辻は、「世間が自分を臆病者と見るからではなくして、自分がおのれ自身を臆病者と感したくないからである。…：自分はその堪忍において、命を惜む意地きたなきや卑しさを感ずる。自分はそういうおのれ自身を許すことができない。だから自分は、おのれが死を怖れないということ、おのれの面目はおのれの命よりも貴いということを、おのれ自身の前にはっきりと示したいのである。」と説明し、「尊敬の念の満足のみをめざしている」、「高貴性の道徳」であると評価している。

意地の発動地盤には、人の資質の多様性や時代性から考えて、むしろこの両方の傾向が混在していたのが実状であろう。

内藤長十郎の「人が自分を殉死する筈のものだと思つてゐるに違ひないから、自分は殉死を余儀なくせられてゐると、人にすがつて死の方向へ進んで行くやうな心持」は、津田のいう、世間体を行動の決定基準とする「不純」なものという論で、スムーズに説明できる。鷗外も「弱み」だと評価している。弥一右衛門の切腹の動機は、和辻のいう「尊敬の念の満足」という論によって解釈すれば、うまく説明できるようである。これについては、後に述べる。

次に、主従関係を最上位に置き、「私の意地」を下位に置くことを「武士の意地」の内容とするものを見よう。

「是非一度は大功を立んと思ふごとくの意地有之」「不勇者と申は主君をも親をも上へ斗にうやまふふりを致し信實に大切と存る意地もなし」「忠義の道をも能弁へるを意地ある武士」「意地むさき動方を仕るとあるは悉皆侍の皮をかぶりたる小もの中間にひとしき様子也」など（『武道初心集』）、功名・勇気・義・勤勉が、忠に向つて結びつけられている意地である。これは、興津弥五右衛門や柄本又七郎の解釈にあてはめてよかるう。

以上の七書がいずれも、「武士の意地」を、武士の心構えの意味で使っていること、また、意地の発生基盤には、矯飾と尊敬と忠との三傾向があることを見て来た。

次に、(一)我意ヲ張りトホス心、抗敵氣の意味に使つている用例には、「権勢に服従するにはあまりに意地張りであつて」（津田左右吉、徳川初期の浪人の説明）、「武士の意地を立つることは、過ぐる程にするものなり。よき加減にして置きたることは、後日の評判に不足出来るものなり。」（『葉隠』）などがある。これは、争氣が強いの意味で使われている。

「葉隠」は、「意地は内にあると、外にあるとの二つなり。」と言っている。これは大言海の(一)(二)にそれぞれあてはまるものである。そして、意地を発動するし方、それに附随する評価を、価値的に段階つけて四類型にまとめている。

1、「外にも内にもなきものは、益に立たず。」

外にも内にも意地がないことを、『武道初心集』では、「意地の無之」「意地もなし」と言い、「むさき意地」「意地のきたなき」「未練の意地」などと評価している。大言海が「意気地無し」を「物ノ用ニ立タヌヲ云フ」としているのと、「葉隠」が「益に立たず」と評価しているのが一致しているところから考えると、武士として内に持つべき気節がなく、従つて意地を立てるべき時に意地を立てない者は、社会が無用者としてはね出したであろうということが考えられる。侮蔑という制裁があることはもちろんである。畑十太夫はこれにあたる。

2、「外にばかりありて、白刃を不断振り廻る者には人が寄りつかず、一味の者無きものなり。」

外にばかりある意地とは、武士として当然意地を立てるべき時に意地を立てるだけでなく、私的な、些細な侮辱に対しても、堪忍することができず、衝動的に意地づくになるものである。「私なる意地」（『甲陽軍鑑』）にやっきになつて、「喧嘩口論などを仕出して友傍輩を打果し我身命を失ふと有は一かたならぬ不忠の大不義」（『武道初心集』）である。こういう意地は、思想的に

は、「武士の意地」であるべき義や忠などの公的使命の観念が欠除したもので、忠の観点からだけでなく、主従関係と独立の自敬の道徳という観点からも、正義として非難される。正義や忍耐に反するものである。これを気質から見ると、争気の強い者、体面に神経質な者に多い。

高見権右衛門の小姓は、これに入れてよいだろう。

3、「内にばかり納め置き候へば、錆もつき刀も鈍れ、人が思ひこなすものなり。」

これは、「気節・廉恥」として、意地を内に持っていないながら、武士として意地を立てるべき時に意地を立てないものである。何かの理由で、堪忍していたり、思想の特殊性から、機をのがしてしまふものである。それを、人が意気地なし、臆病者、卑怯者だと誤解し、「思ひこなす」(ばかにする)のであるが、これは、節操ある武士にとっては、がまんならないことである。本人と世間との評価にギャップがあり、それが悲劇のもととなる。阿部弥一右衛門をはじめ、鵜外が好んで描く主人公の多くは、これに入る。

4、「切れ物を研ぎはしらかして鞘に納めて置き、自然(万一の時)には抜きて眉毛にかけ、拭ひて納むるがよし。」

武士の意地である忠義勇・廉恥をみかいて、「死を常に心にあて」(『武道初心集』)でいて、万一武士の意地を立てなければならぬ時に会えば、機をのがさず決断し、事が終ればまた平素の修養に返るのを「よし」とする。「自然」の時というのが、「武士の意地」のうちでも、忠のための意地である場合は、世間の評価との間にギャップが生じない。柄本又七郎の「義」や、栗山大磨の大志節はこれに入れてよからう。

以上、寛永十八年頃の「武士の意地」の、内容と、意地の発動のしかた、その評価という面をほぼ明らかにし得たように思う。次には、これらに照らし、弥一右衛門の一連の行動を具体的に迫って見よう。

阿部一族の滅亡の最初の原因は、「弥一右衛門が殉死を願つて許されぬ」とにあった。主君忠利が弥一右衛門の殉死を許さなかったのは、「此男の意地で勤めるのを知つて憎いと思つた」からである、と鵜外は設定している。実際には、もっと別の事情があつたのかもしれない。

鵜外が粉本にした『阿部茶事談』はどう描いているか。

「多年の御恩を可奉報と思ひ殉死之願をいたしけるに忠利公いかに思召にや御免なくて志は御満足ニ思召といへとも同じくハ光尚公に右勤のことくはけミ可申由被仰出けれハ此度ハ御別れ是非なく思ひとまり自然の事もあらハ光尚公の御馬の先にて年来の御思を可奉報と悲歎の涙にくれながらおしからぬ命ながらへて君命の重きを守りけるに：人の口に乘けれハ弥一右衛門是を聞伝へ扱々不及是非事かな惜かるへき命にあらねと君命重きゆへかくなからへて居る事自然の御用にも立へき所存なり少しも惜むへきにあらず武運に叶ハざる仕合なりいてさらハ瓢筆に油を塗りて悪口せしやつはらに腹を切て見せんと御免なきに押て殉死をそ遂にける。」<sup>(8)</sup>

『阿部茶事談』は、弥一右衛門の追腹の心境を、鵜外が描いたのと同じく、世間に対する意地だとしてはいるが、殉死の願い方や生き残る時の決意には、主君忠利に対する不満も意地も描いていない。彼の殉死の動機は、多年の御恩に対する報恩のためであり、主君が許可を与えなかつた理由は不問にして、無批判に従順に受けいれ、君命を遵守して、光尚に身命をささげて忠勤しようと決意するのだとして描いている。君君たらずとも臣臣たりという絶対忠誠の観点から書いたものである。こういう描き方は、おそらく当時の習慣的筆法でもあつたのだろう。

殉死を許さなかつた真の原因は、あるいは「忠利公いかに思召にや御免なく」という記述の背後に隠されているのかも知れない。

ともかく、鵜外は、『阿部茶事談』の筆者の、批判を絶した君命とそれを操守しようとする忠臣の悲劇、という解釈を取らなかつた。また、封建君主の恣意的命令が人間の運命を左右するというような、不合理な制度そのものへの批

判として徹底させる、近代的解釈も取らなかつた。

「忠利公いかに思召にや」という史料の空白に想像力を駆使して、主従の相性の問題、意地に対する憎しみの問題として描いたのである。

鷗外は、弥一右衛門が意地ばかりで奉公して行くようになった原因を、忠利の「反対する癖」や憎しみが、そう「為向けた」のだとして、まず境遇から説明しているが、それを徹底しないで、その反対する癖や憎しみの原因は、弥一右衛門の、人に愛情を与えるのに用心深い性格や傲慢な自尊心が、主従関係の障害になっているのだとして、結局は、性格的なものに原因をもって行っているのである。悲劇の原因を社会的なものに求めず、性格などという、時代を越えて存在する運命的なもの、個人的なものに求めるのは、鷗外文学の特徴の一つである。

さて、鷗外は、弥一右衛門の意地を、追腹を切る時の世間に対する意地だけでなく、主君に対しても向けられているものとして描いている。平素の精動も、殉死の動機も、殉死の願ひ方も、主君に対する意地であつて、一途な忠情からしたものではない。それが禍して殉死の許可が下りず生き残る決意をするが、その時の心境は、先君や当主をも含めた世間に対する意地である。追腹の心境もまた、世間に対する意地である。相手が世間であれ、主君であれ、弥一右衛門は「主従関係と独立に生命を惜しまない潔さそのものを尊重する」。終生一貫して「廉恥の道徳」、「自敬の念の満足」（以上和辻）という武士の意地を貫き通す。その主従関係と独立の意地が葛藤を生むのである。

鷗外はそういう解釈をするために、「阿部茶事談」の記述を忠実に追つては矛盾が出てくるので、意地と矛盾する記述は大胆に切り捨て、そのあとの空白は意地で一貫させるために、何十年も遡つて主従関係や性格や、心理を長々と挿入説明したと考えることができる。

そこで次に、個々の場面の弥一右衛門の意地を、先に分類した寛永十八年頃の「武士の意地」の内容と、意地の発動のし方と、その評価に照して、眺めて見よう。

#### (一) 平素の精動にみられる意地

「弥一右衛門は外の人の言ひ付けられてする事を、言ひ付けられずにする。外の人の申し上げてする事を申し上げずにする。併しする事はいつも肯察に中つてゐて間然すべき所が無い。弥一右衛門は意地ばかりで奉公して行くやうになつてゐる。忠利は初めなんとも思はずに、只此男の顔を見ると、反対したくなつたのだが、後には此男の意地で勤めるのを知つて憎いと思つた。」

鷗外は、弥一右衛門の意地づくの奉公を、完璧な奉公だとして、他の侍のやうに御意見伺いをして命令を待つて実行する従順な奉公とは、明確に區別して描いている。主君に対する献身的奉公や絶対従順でないモラルは、戦国武士の意地の名残りである。

こういう完璧な奉公を支えているのは、弥一右衛門の氣質と思想である。三島由紀夫は、「ご用に立つとは武士にとって二つの意味がある。一つは身を滅して君に忠たらんとすることであり、一つは緻密な、実務的才能をもって国へ奉仕することである。」と言っている。

弥一右衛門は、思想から言えば、奉公の正義を実務的才能で奉仕することだと考える侍の典型である。こういう形の忠義も、平素においては、「武士の意地」「武士の正義」の一つである。「ご用に立つ」ことができるという点で、側近としての「立場」も、世間に対する「面目」も、確保できたわけである。

また、寵愛というものを不可欠の条件とする側近でありながら、主君に嫌われて働き場がない窮地に追い込まれた時、その打開策として、完璧な奉公という方法を取るのには、彼の氣質にも原因がある。

彼の傲慢な自尊心は、主君の寵愛を受けて献身的な奉公をしようとする工夫には向けさせなかつた。寵愛を受けることを忠勤の手段だ（『葉隠』）とは考えず、寵愛を受けようとするそのものの中に申しさや意地きたなきを感じて、彼の潔癖さがそれを自己に許さないのである。「武士は妾とは違」って、主従の愛情関係と独立に、実務的才能によつて奉公をすべきものである、それが「武士の意地」であると考える。彼はその工夫に全力を注ぎ、意地を貫き通

す。そういう自分に誇りを持っている。

意地の発動のし方は、「外にばかり」ある意地の一変種である。意地の対象が傍輩でなく、主君であったために、「白刃を不断振り廻る」(『葉隠』)とはできないので、冷戦状態が続いたのである。

こういう意地に対しては、傍輩が敬して遠ざけるだけにとどまらず、主君が憎んで、いざ殉死という際に許可せず、窮地に追い込むことにもなる。

## (二) 殉死の願ひ方にみられる意地

平素の奉公では、主君に憎まれても、完璧な奉公さえしていれば、「立場」も「面目」もあった。ところが、殉死には、主君の許可を得ることが掟として設定されている。平素のような命令無視は無効である。許可がない限り、立派に死んでも名誉にはならない。犬死である。「主従関係と独立に身命を惜しまない潔さそのもの」を武士の意地とし、それに附随する名誉を重んずる弥一右衛門が、殉死を自発的に願ひ出、意地でも許可を得ようとするのは当然である。弥一右衛門の殉死の動機を、殉死の典型として描かれている内藤長十郎と比較してみると、弥一右衛門には、長十郎のような窮愛も失錯もないから、報酬と賠償のために死ぬのだという実感が無い。それが欠けていれば、殉死は冷たい義務的なものになってしまう。

動機において、主君への愛情の情が欠けていれば、願ひ方にもそれがあらわれる。

内藤長十郎は、「忠利の足をそつと持ち上げて、自分の額に押し當てて戴いた。目には涙がいつぱい浮かんでた。」弥一右衛門には、こういう足を拝む心や涙というものがない。

また、長十郎は、「最早本腹は覚束ないと忠利が悟つた時」、最初にして最終の願ひ出をする。弥一右衛門は、「夜伽に出る順番が来る度に」「何度」も願ひ出る。最後の時は、今まで一度も忠利にお願ひということをしなかったことがなく、これが生涯唯一のお願ひと言つて「ちつと」忠利の顔を見る。相手の感情を考えない、面当てがましい、執拗な願ひ方を見れば、どうしても許可を得ようと

して、徹底的に押しかかり退かない「意地」そのものであることがわかる。「抗敵氣」、争氣の意味で「意地」を描いている。

## (三) 生き残る時の心理にあらわれている意地

「犬死と知つて切腹するか、浪人して熊本を去るかの外、為方があるまい。だが己は己だ。好いわ。武士は妾とは違ふ。主の氣に入らぬからと云つて、立場が無くなる筈は無い。」

これは、世間の非難を承知の上で、犬死も浪人もせず、当主光尚の下で精勤することを決意したものである。「己は己だ」という決断を支えているのは、彼の氣質と思想である。彼は「主の氣に入らぬようにしなければ」「立場」がないような道徳を、「妾」の道徳だと考える。意地きたなさや申しさを感じる。「武士は妾とは違」って、主従の愛情関係と独立に「ご用に立つ」ことができると考える。それは義に則つた道であるから、「立場」がある。士大夫として恥じるところがないから、自分の「廉恥」「自敬の念」を満足させることができる。

ところが、彼の精勤に対して、予想通り、家中の者は以前に増して疎々しく応待した。彼は「不快で溜らない」が、「己は命が惜しくて生きてゐるのでは無い、己をどれ程悪く思ふ人でも、命を惜む男だとはまさか云ふことが出来まい。たつた今でも死んで好いのなら死んで見せると思ふので、昂然と項を反らして詰所へ出て、昂然と項を反らして詰所から引いてゐた」。これは、自己に不利でも、孤立しても、意地を通してゐるのである。それを支えているのは、「命を惜む男だとはまさか云ふことが出来まい」という自信と安心感であり、名聞を大切にしているから犬死をしないだけで、大義名分になつた死ならいつでも死ぬ覚悟ができてゐるという自信である。こういう敵対は近代抵抗精神ではなく、中世的な「武士の意地」である。命を惜しまず名を惜しみ、君命に従つて精勤し、そうする自分に対する「自敬の念」が、彼を支えているのである。ここで意地の向けられている対象は、「氣に入らぬ」光尚や、遺命を出した忠利も含めて、犬死か浪人かの道しかあるまいと考えてゐる世間である。まわり



の全ての人間に対して、意地を張り通しているのである。

#### (四) 追腹の切り方にみられる意地

「家中一般の噂ちやと云ふから、おぬし達も聞いたに違ひない。此弥一右衛門が腹は瓢箪に油を塗つて切る腹ちやさうな。それちやによつて、己は今瓢箪に油を塗つて切らうと思ふ。」

弥一右衛門の追腹の動機は、悪口を言う世間に対して「武士の意地」を見せるためである。家中の者は弥一右衛門が死ななかつたということに対して、臆病者、卑怯者、恩知らず、厚顔無恥な男だとして烙印を押ししたのである。

これは、世間と弥一右衛門との思想のギャップから悲劇が生じたのである。命を惜しまないから臆病や卑怯ではなく、実務的才能で「ご用に立」っているから恩知らずではなく、名誉を重んじるから厚顔無恥ではないと考えている弥一右衛門にとって、それは「思ひの外の事」であつて、そういう誤解をされるは黙過できない。また、世間にそう見られる「おのれ自身を許すことができない」。(和辻) 殉死の許可がないのに切腹することは、殉死の掟を破ることである。「掟を破ることは主君にそむくことであり、一族を串刺しにされることは家族的人倫関係を破壊することであるが、それを冒してもなお自分が臆病者でないことを実証しようとする」(和辻)のである。忠や孝や利欲から超然とした、廉恥そのものを重んずる「武士の意地」である。彼は、世間にあやつられて、心ならずも切腹したのではない。彼の氣質と思想が、世間の非難を許せず、自分を許せなかつたために、自ら死へ突進し、その正しさを実証しようとしたのである。

以上弥一右衛門の意地を具体的に見てきた。弥一右衛門の意地は、内容から見ると、主従の愛情関係とは独立に生命を惜しまない潔さそのものを尊重し、実務的才能でご用に立つことを武士の忠義とし、名を重んずる「自敬」の道徳、「廉恥」の道徳であると言える。意地の発動の仕方から見ると、内に武士としての意地を持ちながら、意地の内容が忠情(「阿部茶事談」)と独立したものであつたために、発動すべき機をはずして、世間にいくじなしだと誤解され、

予想外の侮辱を受けた。彼の自敬の念は、世間と自己とを許せないもので、自らの潔白を証明して見せたのである。弥一右衛門の意地は、「自敬」の道徳、「廉恥」の道徳を自らの操として課し、終生一貫してそれを貫こうとする意地である。これは明らかに、戦国時代の武士の意地に属するもので、柄本又七郎の意地と同時代の気風のなごりである。そういう大義に拠って立ち、「立場」と「面目」を守って奉仕しようとするのは、近代抵抗精神とは言えない。あくまで中世的な気風であるとしなければならぬ。中世的なものと近代的なものとの相剋ではなくて、中世倫理内部での価値等差による悲劇である。寛永十八年頃は、忠のための意地と自敬のための意地とが混在していた。戦国時代には「高貴性の道徳」であつた自敬の道徳は、徳川治平下では主従関係が固定するので、一切を忠義へ向つて結びつけようとなされた。忠と無関係な意地は「私の意地」であつて、下位の価値しかもたなくなつた。山鹿素行の「士道」は、儒教の忠孝観によつて、「武士道」の自律性を、戒律化し、固定化したものであつた。寛永十八年頃とは、そういう、一方では戦国的気風と、他方では治平的気風とが互にしのぎを削つていた時代であり、鷗外はそれを、「阿部一族」の諸人物の上に巧みに描き分けているのである。

なお、これにすこし付け加えておこう。鷗外はなぜ「阿部茶事談」の空白部から、「意地」の悲劇を読み取つたのであろうか。鷗外自身の、軍医局内での人間関係とくらべてみると、弥一右衛門造型には、鷗外の体験や実感も相当含まれていゝと言つていいのではないか。初期医学論争における石黒忠憲ら元老との敵対、医務局長時代の石本陸軍次官との敵対(二回辞表を出している)など、鷗外自身の中に、弥一右衛門的な意地があつたらしいと推量し得る点は多い。いわば、歴史上の人物を借りて、回想と整理による鎮魂をしたものではなかつたらうか。(傍点筆者)

注(1) 高橋義孝「森鷗外」

(2) 唐木順三「鷗外の精神」

(3) 斉藤茂吉「鷗外の歴史小説」(昭和11・6「文学」所収)

- (4) 津田左右吉「文学に現はれたる我が国民思想の研究」
- (5) 古川哲史「武士道の思想とその周辺」
- (6) 岩上順一「歴史文学論」
- (7) 稻垣達郎「近代文学鑑賞講座四巻 森鷗外」
- (8) 「阿部茶事談」(細川家蔵の本文。三好行雄「森鷗外」の注釈の引用によった。)
- (9) 三島由紀夫「葉隠入門」